

これらの様に別けられ、いずれも教育環境測定に関連してくる。

の場合、両親がいても経済的に苦しい場合）はやや内向性、内向性を示している者が多い。つまり人間の先天的な素も環境によつて、或る程度、いやそれ以上に左右されるものゝようである。更にこれを学習面からみてもこの二つが関連性を有することがわかる。  
〔三十二年度卒業〕

## 吉野川の童女

### 一 瀬 幸 子

古事記には雄略天皇の御事蹟を語る幾多の物語があるが、その多くは天皇の温い御性格を示す求婚説話である。それらの説話の中の「吉野川の童女」の歌物語をとりあげて上代歌謡の本質にふれてみたい。

記の全文を引用すると

天皇、吉野の宮に行幸でよしし時、吉野川の浜に童女有りき。其の形容美麗しかりき。故、是の童女と婚ひして、宮に還り坐しき。後更に亦吉野に幸行でましし時、其の童女の遇ひし所に留まりまして、其処に大御吳床を立てて、其の御吳床に坐して、御琴を弾きて、其の嬢子に舞為しめたまひき。爾に其の嬢子のよく舞へるに因りて、御歌を作

ぐまれている、家庭の鬱屈気度の高い兒童は、同性も同性、やや外向性を示し、家庭的にめぐまれない兒童（片親

みたまひき。其の歌に曰ひしく、  
吳床座の神の御手もち弾く琴に舞する女 常世にもがも  
といひき。（日本古典文学大系）

この歌について宣長は「こゝは此ノ嬢子の形姿と舞とを感賞賜ひてあかず所思看て如此ながら常世に何時までも舞ひてあれかしと願ひ給ふなり」（古事記伝）ととき、土橋寛氏は「独立歌謡として神前で舞う巫女の姿を讃めた歌と見る方が自然である。神樂歌か。」（古代歌謡集）と解していられる。

ところで本朝月令をみると、天武天皇にも吉野の宮で女子の舞を見られた説話があり、それは五節の舞の起源とされて居り、次の歌詞をにかけている。「少女ども少女さびすも唐玉を袂にまきて少女さびすも」又、萬葉集卷五には山上憶良の歌として「少女らが少女さびすと唐玉を手本にまかし同輩兒らと手拂はりて遊びけむ時の盛を止みかね云々」（八〇四）とある。月令の歌と憶良の作と何れが先であるかについては説があるが、（南京遺響には月令を先とし契沖は憶良のを先としている）これについて守部は「五節舞を云る文こそ、いみじき漢意の潤色にして信がたけれ」（稜威言別）ととき、次田潤氏も「吉野山の仙女の物語は古事記の右の物語から起つたものであつて、月令に掲げた伝説は、支那神仙伝説の影響を著しく受けている」（古事記新講）と解していられる。宣長は古事記の歌謡と

本朝月令との云い伝えをものに相似があり、歌詞も似ているところから「続日本記の記載は古事記雄略天皇のこの条の作り変へである」(古事記伝)と云っている。又、琴歌譜には「短埴安扶理」の歌として「嬢子ども嬢子さびすと唐玉を手本に纏ぎて嬢子さびすも」の歌を掲げている。これは月令の歌と才二句が「平止女佐比須止」となつて「止」の一字が違うのみである。いずれにしても音楽舞踊の起源を語るものとしてその道の人々に尊ばれ受けつがれた歌であると思われる。

雄略天皇を中心とする歌物語の中で、萬葉の卷頭長歌が赤猪子の物語と結びつき、更に袁村比売の話と何らかの關係があると見られる事は一応云えると思う。この様に種々の形に姿を変えた求婚話が主として雄略天皇に結びつけられ、その物語を潤色せしめた原因は天皇の御名を永久に伝えるためにおかれた長谷部、長谷部舍人等の御名代が大いに榮えたということの他に、語部の関子という事を考慮しなくてはならないが、それにもまして妙なる音楽に合わせて、長い美しい袖を翻して舞ううら若い美女の姿は覚めることなく、永遠に続く夢の世界であつて欲しかつたのであろう。これら民謡的なもの、或いは何者かによつて為された一般的感情の表白が、その内容から雄略恋物語にくり入れられたのではないかと思われる。ここに古事記を貫く抒情の流れを見る事が出来、又、上代歌謡の本質の一端を

も伺う事が出来ると思うのである。

## 助動詞「ぬ」に関する一考察

三年 中 村 楷 子

岩波文庫本「源氏物語」と明治書院本「新編平家物語」の中から、助動詞「ぬ」を百例に限つてとり出した結果を考察してみた。なにぶん操作の範囲が狭く、不確実なうらみもあつて、かりにもレポートなどと云はれるものではない。

中西宇一氏は「発生と完了―ぬとつ―」(「国語口文才二七六号」所収)において

「ぬ」は状態の発生を示す

と述べられたが、私は助動詞「ぬ」を総て状態の発生であると思つてしまふ事は無理ではないかと思ふ。

- 1 宮は大殿籠りにけり (源氏桐壺)
  - 2 夜も更けぬ (源氏桐壺)
  - 3 女御も御心おちる給ひぬ (源氏桐壺)
  - 4 嵐吹き添う秋も来にけり (源氏帯木)
- 氏のお考えにそくして解釈すると、例①は、過去の或る